縦割り班活動を通して子ども同士の機能的なかかわりをめざす

～ミュージカル作りに挑戦して～

北川　勝則　　市川　哲哉　　辻本　和孝

今年で３年目を迎える複式学級全体での縦割り班活動である。１年目は詩の群読，２年目は劇作りとステップアップをしてきた３年目。今年はミュージカルに挑戦することになった。これは，過去２年間の活動を引き継ぎながらも，少しずつ表現力を高めていくということもねらっている。また，学年・学級の枠をこえた縦のつながりを重視することで，子どもたち相互の関係を密にし，複式での学校生活を信頼感・安心感がともなったなかですごせるようにと考えた。

実際に活動する中で，高学年の子どもたちはリーダー性を発揮し，低学年の子どもたちは協力しようとする姿勢で取り組めるようになってきた。そして，学習の場だけでなく，休み時間などにおいても縦のつながりが強くなってきた。さらには，ミュージカルでの表現力が高まり，班としてのまとまりも見られるようになった。

しかし，高学年の思いと低学年の思いが違っていることで活動が停滞したり，リーダーが表現の工夫において高度なことを要求し，他の子どもたちがついて行けなかったりと，異学年のかかわり方においては課題が残った。

キーワード：機能的なかかわり，異学年，学年に応じた協力，リーダー性

１．「機能的なかかわりをめざす」とは

１．１．学年に応じたかかわり

縦割り班学習の中で，複式でめざしている機能的なかかわりとは，子どもたちがその学年に応じた積極的なかかわりをさしている。もう少し具体的に述べると，高学年の子どもたちについては，班をまとめたり低学年の子どもたちを指導したりできるリーダー性を発揮すること，中学年の子どもたちについては，元気よさを活かすこと，低学年の子どもたちについては，リーダーに協力することはもちろんのこと，それに加えて自分の思いを伝えていくことである。

このようなかかわりを繰り返すことによって，それぞれの学年に応じた学びが期待された。

１．２．複式という集団の中で

学年・学級の枠をこえた縦のつながりを重視することで，子どもたち相互の関係を密にし，複式での学校生活を信頼感・安心感がともなった中で過ごせるようにと考えた。さらに「異学年のかかわりを中心とする学び合いでの主体性を養いたい」ということで，縦割り班活動に取り組むことにした。

縦割り班活動では，各班での活動が中心になり，そこで個人と個人，集団と集団，そして個人と集団，のかかわりが密になり，お互いに高めあうことを期待した。

さらには，自分たちの表現力を，附属っ子フェスティバルの舞台発表を通して，相手を意識した表現力へと高めるとともに，子どもたちが，協力できている集団・本当の兄弟のような集団であると感じてもらえればよいと考えた。

図１　発声練習をする子どもたち

２．「機能的なかかわり」の実現に向けて

縦割り班活動を行うにあたり，まずは班構成を考えた。各班は，１年生から６年生までの男女各１名からなる１２名を基本として４グループに分けた。各学年の子どもたちを同じ割合で構成することによって，異学年のかかわりを深めようとしたのである。また，同学年の子どもを存在させることで，相談しやすく，活発に活動させようとした。

その４班での活動とミュージカル作りとをうまくリンクさせ，各班で表現の工夫がしやすく，班としてのまとまりを期待して，ミュージカルの場面を４つに分け，１つの班が１つの場面を担当するようにした。

ミュージカルの題は「シンドとバットの冒険」（子供のポップミュージカル・マルコー教育出版）で，いく

つか候補があった中からみんなで考えて決めたものである。台本をもとにしながらも，各班でセリフや動きなどの表現の仕方を工夫しながら，ミュージカル作りを楽しんでもらいたいと思った。

最終目標は，本校のイベントである「附属っ子フェスティバル」で舞台発表をすることにし，それに向かって４６人が協力していけるような単元を構成した。

ここで，どうしてミュージカルに挑戦することになったのかについても述べておく。ミュージカルに挑戦するということは，過去２年間の活動を引き継ぎながらも，少しずつ表現力を高めていくということをねらっている。しかも，子どもたちが，先輩たちが築き上げたものを引き継ぎたいという思いが強く，「今年はミュージカルをやってみたい」という希望も多かったことも考慮している。

図２　複式全体での話し合いの様子

子どもたちの思いと教師の思いがうまくすり合わさって，本単元を構成したと言ってもいいだろう。

そして，私たち教師は４つの班の活動を，子どもたちが中心となって進めていけるように「みとり」と「支援」を行っていく。４つの班なので，担任３人がまんべんなく４つの班の活動にかかわっていく。子どもたちの話し合いの様子をみとり，相談にのったり課題を与えたりといった支援をすることで，班の中でのかかわりを機能させていきたいと考えた。さらには，子どもたちに，授業の後でその日の振り返りとして感想を書いてもらい，その内容から子どもたちの学びをみとっていくことにした。

また，集団と集団のかかわりを深めることにも取り組んだ。各班での表現を他の班に見てもらうことによって，集団同士の学び合いを期待した。

そして，現時点では，まだ最終目標を達成する日には到達していないが，「附属っ子フェスティバル」での発表を経験することで，ここまで努力して頑張れたという達成感や複式のみんなでやったのだという一体感を味わい，複式全体の高まりを期待している。

３．単元の実際

３．１．　１班の活動から

１班が受け持つ場面は，主人公がサルとやりとりをする場面であった。登場人物が少ないことから，鳥や虎を加えて台本を少し手直しすることと，タップダンスやバレエを習っている子がいることから，それらの動きを取り入れることはスムーズに決定した。しかし，場面の展開を考えていくときに，リーダーである６年生の２人が対立することになった。おもしろいセリフや動作を入れて楽しくした方が良いという６年A児と，ミュージカルなのだから，きちんとした方がよいと考える６年B児の２人である。どちらも，よりよい作品にするために真剣に考えているが故に，話し合いの決着がなかなかつかず，班の練習時間の前半は話し合いばかりが続くことになってしまった。そのため，１年生の中には，「何をやっているのかよくわからない。」という感想も出てきて班としてのまとまりがつかない時期もあった。

しかし，話し合いの結果，他のメンバーの意見もあり，面白いセリフや動きを取り入れることに決定した。自分の意見にこだわっていた６年B児は，おもしろい動作をすることを渋っていたが，６年A児と他のメンバーがねばり強く説得したり，代わりに演じたりしながら練習を続けていった。その結果，他の班よりも，仕上がりは遅かったものの，他のメンバーも協力して練習し，ダンスの動きも早く覚えることができた。また，次第に６年B児もリーダーとしての自覚を持って練習に積極的に参加するようになってきた。

図３　１班の活動の様子

３．２．　２班の活動から

２班が受け持つ場面は，はじめの全体での歌の後，まほう使いに主人公の２人の手をくさりでつなげてしまい，くさりのカギを探す旅に出るという場面である。

この班は，６年生２人が上手に班をまとめて，中低学年のやる気を起こしている。特に６年C児は，実際にミュージカルを習っていて，参考のためにとC児が出演しているミュージカルの映像を複式メンバー全員で鑑賞したこともあってか，班全員から一目置かれて

いた。そんなこともあってC児を中心にしてまとまっていった。また人数よりも配役が少なかったため，町の人という配役を自分たちで決め，主人公二人がけんかをしているシーンに，止めに入る役としてつくり出した。主に低中学年がそれを担当することになったが，班全員でせりふを考えたり，動きを考えたりしてみんなでつくり出している雰囲気だった。場面の最後の班全員で踊りながら歌うシーンでも，他の班に先がけていち早く，全員ふり付けを合わせて歌うことにし，他の班もそれに準じる形になるなど，影響をあたえた。

比較的スムーズに進んでいたこの班で一番心配したのは，まほう使い役になった５年生が，はじめははずかしがって声が出ていなかったことであった。しかし，今年「協力プロジェクト」が最後になる６年生の気持ちを伝えたり，実際に真剣に取り組んで練習している６年生の姿を見たりして，責任感が芽生え，しっかりと役作りをするようになった。それだけではなく，まほう使いの手下の役で演じる低中学年に，どんな動きをしたらよいか考えてあげたり，アドバイスをしたりするようになってきた。

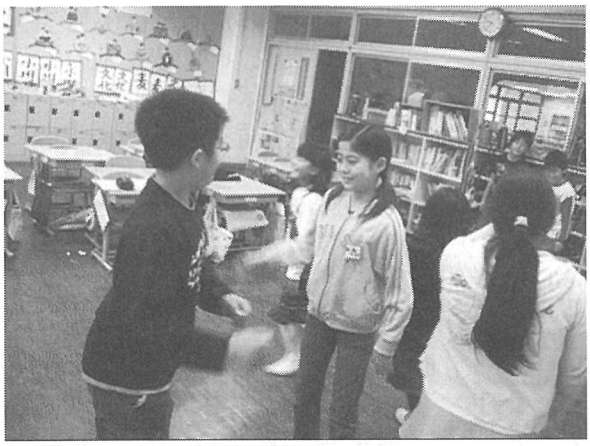

図４　２班の活動の様子

３．３．　３班の活動から

３班は，鎖のカギを見つけるためにヘビのいる一本橋を渡る場面を担当した。リーダーである６年生２人はどちらも積極的に進めようと意欲的で，下学年の子どもたちをリードしてくれた。しかし，６年F児は，見通しをもって取り組むことが難しかったため，６年E児と対立することもあったが，６年E児が一歩引いてサポート役に徹していたので班としてのまとまることができた。

表現の工夫では低学年・中学年の男子が頑張った。ヘビの動きを大きく，しかも楽しそうに表現し，こわそうなそうなセリフを付け加えることもできた。その様子を見ていた６年生は，下学年の工夫を認め，「なかなかいいな」「おもしろいよ」とほめながらやる気を起こすようにしていた。

女子の魔法使い役については５年F児が中心となって，舞台を広く使うように提案し，客席にまで降りてこわさを強調する演技ができていた。５年生も高学年としてリーダー性を発揮できるようになってきたのである。

３班は，個々が自分の役割を果たせるような班に育っていったと感じている。

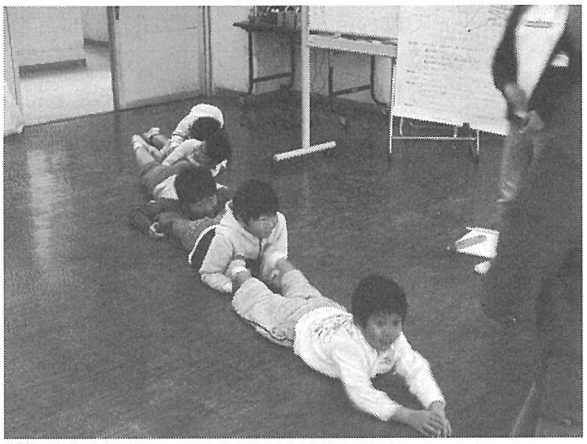

図５　３班の活動の様子

３．４．　４班の活動から

４班が受け持つ場面は，主人公がくじらに遭遇して，くじらのおなかの中に入ってしまい，そこから脱出するという場面である。

この班は特に低中学年に勝手な行動をしてしまう児童がいて，６年生の２人はそれらへの注意で，ミュージカルの内容や演技になかなか入ることができていなかった。すこし注意が行き過ぎることも，低中学年からするとおもしろくなさそうであった。また低中学年の多くがくじらの役（パラバルーンで空気を入れてふくらませてくじらにみせている）になり，大きな動きもなく，せりふも少なく，練習も単調になっていたのも事実である。手に持つパラバルーンがちょうと良い手遊びの道具になっていたことも指摘できる。

しかし途中から，場面の最後に班全員で踊りながら歌うところに出番ができたので，低中学年もすこしまとまって演技ができるようになってきたように感じている。

図６　４班の活動の様子

４．授業の考察

１班では，授業の実際でもふれたが，取り組みの前半は，６年生２人の討論が中心となってしまった。他のメンバーは発言することも少なく，かかわり合いという面ではやや少なかったかもしれない。しかし，それは，表面的なことで低学年のメンバーの中でも，発言はできないものの，真剣に話し合う上級生の姿からいろいろと感じるものがあったようである。以下に示すのは２年生Ａ児の作文の一部である。

「ぼくはがんばったけどまたいけんをいえませんでした。でも，これからもともっとがんばってせいちょうしていきたいなと思いました。それはなぜかというと６年になったとき，もっとがんばらないといけないからです。そのためにゆうきをもとうと思いました。（中略）６年になったときは，リーダーだからちゃんとするというゆうきです。」

この児童は，６年生の姿を見て，リーダーとしてのあるべきイメージを，班活動のかかわり合いの中で持つことができたのだろうと思う。

２班の活動の中では，授業の実際でもふれたが，声が出ていなかった５年生が６年生の姿や思いを見てとって，「自分もきちんと声を出さないと」と感じることができたことが，一番大きい意味を感じる。ここには学年を超えたかかわりが機能していることを意味している。その５年生にとってはもちろん，その下に続く低中学年もその様子を見ているにちがいない。６年生の次の５年生がそのように変化したことを一番近くで感じているはずである。そして同じように知らないうちに変化し，良くなっていくのである。複式学級ならではの異学年の学習の良さがみられた。

３班は，始めて班で集まったときに，一番心配であった。というのも，６年生の２人が対立しうまく進められなかったからである。同じ学年で同じクラスであるのに，どうして上手くいかないのか心配であったが，６年Ｅ児の一歩引いたかかわり方が，３班全体を活性化させることになった。自分の思いを伝えるだけでなく，相手のことも考えた行動ができてきたのである。そして，６年Ｆ児には，その６年Ｅ児の優しさを伝え，お互いに相手の考えも受け入れるように支援した。全体を見通せるまでにはいたらなかったが，６年Ｅ児と相談することが増えた。

また，６年生以外の子どもたちは，魔法使いやヘビの仲間で集まり，相談しながら工夫できたことは，リーダーに頼るのではなく，自分たちにできることをやっていこうというそれぞれの学年に応じた協力ができたことは，この班の成長である。

４班の６年生もかなりリーダー性のある２人である。特に６年Ｈ児は，児童会長も経験している。そんなリーダー性があるにもかかわらず，低中学年の注意に終始してしまったことが，グループをまとめることの難しさを物語っていた。単に始めから終わりまで注意をしたり，「こうするのよ。」「ああしなさい。」などと先回りしたりして指導するのではなく，一度させてあげてそれを認めてあげてから自分の意見を言ってあげるような姿勢が必要なのだろう。確かに低中学年の身勝手さも大きく作用しているのであるが，グループをまとめていくリーダーの手腕は，グループの活動を左右する大きいものであることがうきぼりになった。

５．成果と課題

今回の縦割り班活動を振り返ると，積み重ねていくことの大切さを感じた。というのも，３年目の今年にいたっては，６年生のリーダーが各班をまとめ積極的にリードしてくれたおかげで班のまとまりが生まれ，ミュージカルの内容ではたくさん工夫することができた。これは，２年間取り組んできた中で複式の子どもたちが身につけた，縦割り班活動としての役割分担ができてきたからだと思う。高学年・中学年・低学年としてどのようにかかわっていけばよいのか，意識しながら取り組めるようになってきたのである。

また，授業だけではなく，休憩時間に一緒に遊ぶことも増え，みんなの顔と名前を一致させられるようにもなってきた。本当の兄弟・姉妹のような関係に育ってきていることが大きな成果である。

課題としては，来年度も続けるとして，どんな課題に取り組むのかということである。今回は６年生の希望も多く，これまでの流れを継承する形であった。内容的にも積み重ねとしてよかったと思われるが，少しマンネリ化しているようにも思われる。そろそろ方向性を変えて新しい課題に取り組まなければならないだろう。課題の新鮮さは子どもたちの意欲にもかかわるものだと思うので，どんなテーマで取り組むのかを研究しなければならない。また，時間割の設定も難しかった。３クラスが共通して学習できる時間を確保することと，行事などでの時間割変更に対応することで苦労した。そして，授業時間は週１時間として行ってきたが，もっと深いかかわりをめざすには週２時間は確保したい。しかし，授業時数とのかかわりもあり捻出することは難しい。

今後はこのような課題を残しつつも，縦割り班活動を行う価値は見いだせているため，これからも積極的に取り組んでいきたいと思う。そして，表面だけでなく授業の内容で深いかかわりをもてるようなテーマを設定し，お互いに刺激し合い高めあう関係を築いていけるような研究をしていきたいと思う。

参考文献

平成２０年度　教育研究発表会要項

和歌山大学教育学部附属小学校